

細胞生物とは何かという疑問が沸きました。その疑問について、続く西井先生によるご講演でより理解を深めることになりました。これまでに、単細胞性緑藻クラミドモナスと多細胞性緑藻ボルボックスの比較ゲノムにより、両者に遺伝子及びタンパク質レベルで大きな違いはないことが明らかになっていました。しかしながら今回、よりミクロな観点で両者を比較検証した結果、ボルボックスにおいて生殖に関わる遺伝子 (MID, REG) や細胞外基質形成に関わる遺伝子に多くの重複が検出されたそうです。それらのことから西井先生は、多細胞体制の進化において細胞間連絡の発達と生殖系列と体細胞系列の分化の進行が重要であることを論じられました。また、それこそが多細胞生物の定義となるそうです。どちらの講演も体制が多様な藻類ならではの研究で、最も熱い藻類研究の一分野であることを感じました。着眼点など今後の研究の参考にさせていただきたいと思えます。

藻類談話会では十分時間をかけて講演・質疑応答が行われ、まだ知識が不十分な私でもその研究背景や思惑を理解した上で質疑応答に望むことができました。さらに四つの講演を通し、藻類研究の面白みや必要性について深く考えることができました。また懇親会では、演者の方々や先生方、学生間で意見交換ができ、有意義な時間となりました。駆け出しの大学院生である私にとって、このような場に参加できたことは



懇親会でのひとこま

非常に良い経験となりました。来年度は京都大学で開催されることが決まり、是非参加したいし、より多くの学生にも参加して欲しいと思いました。

(福井県立大学・生物資源学研究所・海洋生物資源学専攻)

土屋勇太郎・天野裕平：UJNR 水産増殖部会に参加して

UJNR 水産増殖専門部会第39回日米合同会議科学シンポジウム「養殖産業の現在と将来」が2010年10月25日と26日の両日、鹿児島大学で開催されました。UJNRとは、1964年に設立された天然資源の開発利用に関する日米会議 (U.S.-Japan Cooperative Program in Natural Resources) の略称です。水産増殖専門部会 (Aquaculture Panel) は1968年に設置され、1971年から合同会議が日米交互に開催されています。

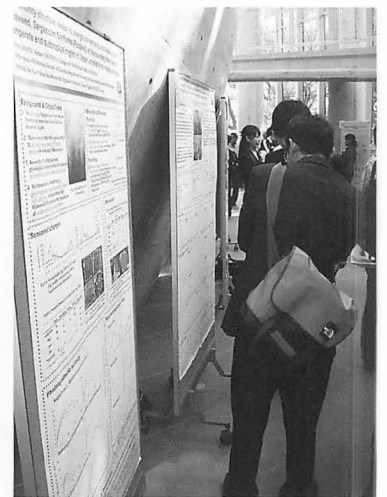
39回目の本大会は、1) 水産養殖に係わる研究や政策、2) 養殖業の概要やプラン、3) 養殖生産技術を巡って、4) 養殖業における経営と社会的、経済的課題、5) 養殖産業を支える諸技術、6) 資源培養、に関する話題を中心に、口頭発表とポスター発表がありました。NOAAや水産総合研究センターの研究者の方々の発表が中心でしたが、九州地区の大学院生もポスター等で発表しました。海藻に関する発表は、指標種やバイオフィルターとしてのアオサの利用に関する研究や、環境変動がヒジキなどに与える影響に関する研究がありました。全体を通しては、ウナギの完全養殖に関する発表が関心を集めていたように思います。

これまで、大学院の研修でフィリピン大学ビサヤス校やSEAFDECを訪れる機会があったものの、政府間の協定で

開催される国際会議への参加は初めてであり、英語漬けの2日間はとても勉強になりました。ポスターは一読してもらえばわかるように作成しましたが、口頭での説明はまだ努力が足りないことを痛感しました。懇親会では面識のない米国人研究者にも積極的ににお酌し、日米関係の向上に貢献するとともに、自分の語学力の向上にも努めました。

40回目となる次回の日米合同会議科学シンポジウムは、2011年秋に米国ハワイ州で開催される予定です。発表の機会をいただきました関係者の皆様に深く御礼申し上げます。

(鹿児島大学・水産学部)



ポスター発表の様子